

2020. 5. 25 教育文化研究所 長阿彌幹生 wrote.

夏鳥が南の国から渡ってきました。ツバメやキビタキなどは随分早くから飛来していましたが、ホトトギスやカッコウなどの声も近くの山から聞こえてくるようになりました。先日はオオルリという、姿（オスは頭部・背中・胸が瑠璃色に覆われています）も鳴き声も美しい夏鳥に出会いました。これから夏鳥たちの声も聞けるので楽しみです。

★オオルリ:7月17日蛇ヶ谷(玉名市)にて撮影
※トンボを啜っていました!



■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■ なかよし情報200525:「言葉」が“力”をもつために ■■■■■■■■■■

信頼や信用が無ければ「言葉」は力を持ちません。では、信頼や信用とは何によって築かれるのか？それは誠実な正直な日々の言動、行動の積み重ねから築かれていくものではないでしょうか。昨日の朝日新聞にこのことについての文章が掲載されていましたのでその一部を紹介したいと思います。「他山の石」として、私自身も気を付けていかなければなりません。

■「言葉」に逆襲される首相（朝日新聞 5/24 朝刊：日曜に想う）

～ 中略 ～

言葉を弾丸にたとえるなら、信用は火薬だと言ったのは、作家の徳富蘆花（ろか）だった。火薬がなければ弾は透（とお）らない、つまり言葉は届かない、と。数を頼んで言葉への横着を重ねてきた首相に、もはや十分な火薬があるとは思われない。弾も自前ではなく大抵は官僚の代筆である。

丁寧、謙虚、真摯（しんし）、寄り添う、といった言葉をさんざん「虐待」してきたのはご承知のとおりだ。いま、危機のときに言葉が国民に届かず、ひいては指導力が足りないと不満を呼ぶ流れは、言葉に不誠実だった首相が、ここにきて言葉から逆襲されている図にも見えてくる。

～ 中略 ～

ところが首相には、言葉で合意をつくったり、人を動かそうとしたりする印象がない。数で押し、身内で仕切れれば言葉はもはや大事ではなくなるのか。国会では早口の棒読みか不規則発言。スピーチなどは「国民の皆様」と懇懃（いんぎん）だが、中身は常套句（じょうとうく）の連結が目立ち、「言霊」を思わせる重み、深みは感じられない。

作家の故・丸谷才一さんが14年前、安倍氏が最初に首相に就いたときに、新著「美しい国へ」の読後感を本紙で述べていた。「一体に言いはぐらかしの多い人で、そうしているうちに話が別のことに移る。これは言質を取られまいとする慎重さよりも言うべきことが乏しいせいではないかと心配になった」

辛口の批評だが、老練な作家の洞察力は、後に多くの人が気づく「首相の言葉の本質」をぴたりと言い当てている。

～ 中略 ～

そうした状況に向けて首相は強い言葉をよく繰り返す。「躊躇（ちゅうちょ）なく」は連発ぎみだし、ほかにも「積極果敢な」「間髪を入れず」「一気呵成（かせい）に」など色々ある。「力の言葉」を、「言葉の力」だと勘違いしてはいないか。

川を渡る途中で馬を替えるな、は危機を乗り切る常道だ。しかし「コロナ後」という時代の創出は、新しいリーダーを早く選び出すかどうかの選択から始まる。すべては民意にゆだねられる。

(編集委員・福島申二)

■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■ 教育文化研究所の主催・関連イベント紹介 ■■■■■■■■■■

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、活動を自粛していましたが、6月より感染予防に配慮しながら、徐々に再開して参ります。詳しくは教育文化研究所のホームページの活動スケジュールをご覧ください。⇒<http://kyoikubunka.com/>